神になった転生者

困舎刀風旗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神になった転生者

【Ｎコード】
Ｎ３０９２Ｚ

【作者名】
困舎刀風旗

【あらすじ】
色々あって、高校生が転生することに。
転生先はテンプレ通りの剣と魔法の世界。少々おかしな、神になった少年がテキトーに暮らしていくものです。
「そう、つまりテキトーにランクが高い魔獣とかを倒したり、学園で勉強したりする物語なのだよ。いやはや、つまらなそうだ」
処女作です。作者は未熟者です。そのため表現とかその他いろいろが全然ダメです。でも、楽しんでもらえると嬉しいです。

初話：ふむふむ、記憶にないな（前書き）

どうも、はじめまして。
処女作です。そのため、表現とかその他いろいろが全然ダメです。
覚悟しといてください。

初話：ふむふむ、記憶にないな

「おーい。起きてる？大丈夫？」
目をあけると、そこには神がいた。
いやいや、嘘じゃあないよ。
何故かは分からないけれども、わかった。なんだろう……、神のオーラみたいなものが感じられたからだ。
でも、それがあまり感じられない。それに、姿が女ということもあって、あまり神らしくない。ちなみに、その女は黒髪黒目の純和風美人。さらに、巫女服。
つーか、神っていうとキリストやゼウスのようなオジサンとかだと思っていたのに……。
「あのさ、あたしを、あんな大物と比べないでくれる？
そ、れ、に、失礼だよ、おじさんなんて言うのは」
目の前にいる女が話しかけてきた、それよりも！
「何故わかった！？おれが考えていることを！？」
「いやぁ、此処はあたしが管理している空間だから、物事は常に、あたしの思うがままなのよ。だから、常に現象はあたしに、現象を起こしていいか？と聞いてきていて、それは、観測してるのと同じようなものなのよ。
それに、今のあなたの肉体はあたしが作ったものだから、わかるのよ。
あたしはこれでも、神の端くれだからね」
つまり態々喋るという行為をしなくてもいいということか。これは、楽だな。
ん？でもまてよ、神という割には全然神らしくないのだけれど……。
「まぁ、あたしは神って言っても、人から神になったからね、……
…人らしさが残っているのよ。と、いっても一千年前ぐらいになったんだけど……」

一千年前だと！？おば「？なんか言おうとした？」

「いえいえ、何でもないですよ」

足が砂になっていった………。　怖…くないもん。がたがた、ぶるぶる。

今度は手・・

危ない、危うく考えそうに………ってこういうのもダメなんじゃん！

なんてことだ！精神の自由はないのか！？

「だって日本じゃないし、ここ。それに言い訳するようだけど、一千年って神の中じゃあ若い方なのよ。」

ふぅん。というより今さら気がついたけど、やっぱり人から神になれるんだ。オレもなってみたかったなぁ～。

「いやいや、君は何を仰っているのかな？」

は？

「あんたはもう神になっているよ。」

へ？何言ってんだ？こいつ？馬鹿か？

「おいこら殺すぞ？あぁぁぁん？」　「と言いたいところなんだけど、」

『と、言いたいところ』なら頭だけ残して全部消す必要はないんじゃないのか？

「やっぱり、憶えてないのか。じゃあ、簡単に説明するよ。

まず、あんたの学校にテロリストが来て、」

華麗に無視して話を始める神様。

「そんで、あんたの学校にいる首相とかをはじめとする政治会の人や、経済界の人の子供を人質に取ろうとしたのよ」

ふーむ。まったくもって思い出せない。というよりオレの学校にそんな大物の人達って居たっけ？

「いたわよ～。まぁ、そういう情報は隠されていたけれど……。

まぁ、それで、クラス単位で制圧しようとしたんだけれども……、あんたのクラスにやってきた人に対して何をとち狂ったか、あんたがそれに反抗してテロリストの動きを封じたのよ。
まぁ、だけど一人しか拘束できなくて、すきを見てロリストが、M92でドーン。で、あんたを殺した。」
おいおい、神になってねーじゃあねーか……。
というより、オレ何やってんだよ……。
「つーか、なんでベレッタM92を知ってんだよ!?」
「そんなことはどーでもいいじゃない。
それよりも、神になるのには死ぬことが絶対条件なんだよ。ほら、キリストだって死んで生き返ったでしょ?それと同じような事よ」
そうか?
「そうよ。それで、あんたは死んで生き返って、覚醒。神になったのよ。それで、あなたは逆襲をして、テロリストを全員捕まえた。だけど、その能力(ちから)に恐れをなした神々はあなたをこの神が生まれる世界――――原初世界――――から、他の世界にあなたを移すことにしたのよ。」
うわぁ。神に恐れられるなんてすごいなぁ、オレ。
「なぁに他人事みたいに言ってるのよ。あなたのことでしょうが。で、あたしは、怒りを買うと自分達が殺されかねないからって、他の神に押し付けられてあんたに――――あぁ、神になってるあんたね――――念話ってわかる?テレパシーとかのことね。それであんたに話しかけて、その……テロリストと言えばいいのかしら?を倒してもらったの。
で、その報酬で、異世界に転生させてあげますよってことにしたのよ」
なるほど、それでここにいるのか。うん、まったくもって、何も思い出さないなぁ。
まぁ、いっか。神になったから転生して、剣と魔法の世界に行くことになったんだし。死んだのはどうでもいいか。いやはやしっかし、

「しっかし、あんたも大変だなぁ～。下っぱだから、もし何かが起こってもいいように使われたわけか。と、いうか俺にそんなこと言ってよかったのか？」
そういうと驚いたような顔をした。
「ええ、いいのよ。そして、よくわかったわね、それ。
でも、いろいろと力をもらって神格が上がったからいいんだけどね」
いいのかよ。はぁ。
「で、あんたはどこに行きたい？」
うん？ＩＦ。
「何よそのＩＦって……。
で、言葉が足りなかったわね。どんな世界に生きたいの？ってこと」
ふふふ、まさか神にさえ分からないとは思わなんだぞ！！！ＩＦとは
「い・い・か・ら……答えなさい」
「はっ！はいっ！」
い、言えない。何があったかは言えない。察してくれ。
「もう一度？」

うん、早く答えるからやめてください。ってゆうか何でおれに神の力がないんだよ！
「それは、封印してるからよ」
なんだよ、それ……。せっかく神になったのに！まぁ、仕方ないか。
神に恐れられるぐらいの力だったんだし・・・・・。
「で、どこに行きたいの？」
「えっと、特にな

「もう一度言ってみなさい」
「えっとですね、まぁオーソドックスに剣と魔法の世界に生きたいなぁ～なんて」
なにもなかったよ。
うん。空白あるけど何もなかったよ。
「それだけ？それだけだと沢山あるんだけど。じゃあ、こっちで勝手に決めるわよ。それでいいわね？」
「ＯＫ」
「さて、次にやることは……ああ、そうだったわね」
なんか紙みたいのを空中から出現させて、見る神。いや女神か？
「なるほど、じゃあそうしましょうか」
と独り言。
なんだ？
「え～っと、あなたの深層意識からあなたが欲している能力がわかったから、もう終わりね」
どういうことだ？
「つまり、お別れの時間が来たということよ」
だから、どういう意味だ？
「もう、必要なことが一応終わったから一時期の間さようならってこと」
ふうん、そうなんだ。
で、おれのチートかどうかは分からないけれど、能力って何だ？
「それぐらいのに時間使うのはかまわないか。
えっと、
剣と魔法の才能
前世の記憶＋色々な情報
忘れようとしない限り、忘れないでいられる記憶
まぁ、そんなところね。
あ、でも、正直言うとこれだけだと足りないのよね～、全部最高レ

ベルにしても。
だから、転生して新しく何か欲しくなったら、言ってね。たいてい夢に出てくるから」
「ＯＫ。わかった」
「じゃあ、いってらっしゃい～」
ふむ、まったくもって楽しみだな、異世界。
視界がだんだんと黒くなりオレは意識をなくした。

初話：ふむふむ、記憶にないな（後書き）

ちなみにＩＦは意味不明を略したイミフの略です。
表現がダメですみません。

できれば、アドバイスをください。また、誤字脱字があれば、報告してもらえると嬉しいです。

二話：いやはや、こわっ

オレが転生して三年が過ぎた。

最初の頃はあまり意識がなく、元の世界の赤ん坊と同じように泣きわめいていたが、1年ぐらい経つと意識がしっかりしてきて、自分が思うように体を動かすことができるようになった。

この世界の人は元の世界と比べ成長速度が速い。そのため、オレは1才半ぐらいでしっかりと話せるようになった。まぁ、意識がしっかりしてきたというのもあるんだが……。

ちなみに言語は日本語。だが、文字は平仮名のような見たことのない文字だった。

そのため、オレはまず文字の読み書きをできるようにした。漢字のようなものとかがなく、平仮名のようなものだけだったため、比較的簡単に覚えることができた。

その後は、家に居る時は家にある本などを読んだりしていた。

ちなみにオレがこんなに自由に行動できたのは、両親から嫌われてるとか、ほっとかれているわけではない。むしろ好意的すぎて困っている。

俺の両親は、二人とも冒険者なのだ。しかも、上から二つ目のＳＳ（ダブルエス）ランクの。

そのため、強制依頼を受けて、やらなくてはいけなくなることがある。さすがに、俺が生まれてから一年半ぐらいは、強制なのに行かなかったが。

そ・れ・で・だ。大抵は一緒に連れていってもらって、母さんに実物を見ながら、野草のことを色々教えてもらったり、父さんに魔獣のことを教えてもらっていたりした。

その旅の途中のことだった。というより昨日のことなんだけど！

誘拐されちゃった　　えへっ。

うん、精神年齢が既に２０近くなっている身としては、気持ち悪い。
なんでこんなのこと言ったんだろう……。
さてと、どういうことかというと、普段住んでいる国、永久中立王国イクォルリーを出て、マグルナルス共和国のとある町についた。
そして、母さんにお使いを頼まれて一人で街の特産品だというものを買いに行った。
そのときに、人ごみに紛れて首の後ろから一発どん！となにかで叩かれた。
その時に思ったのが、
人って首を後ろから思いっきり叩かれると気絶するのは、本当のことなんだということだった。

さて、気づいた
「おい、ガキが起きたぞ！」
まったく、読者に申し訳ないとは思わんのか！まだ説明しきれていないだろ！
気づいたらどこかの部屋にいた。オプションとして、猿轡と手首足首を縄で縛られて。俺は縛られて興奮する奴じゃあないのに……。
と、そんなことを考えていたら、いかにも、荒くれ者です！下衆です！と言えるような格好をした人達が俺の前にやって来た。
「おい、お前。命が惜しいなら黙って俺たちの言うことを聞いているんだ。そうすりゃあ、きちんと帰れるからよぉ。まぁあ、その時

はお前らは全く金を持ってないだろうがなぁ。「「「「ぎゃハハハハハハハ」」」」」
最後は全員できれいに、汚く笑う、下衆。
「おっと、両親とかが助けてくれると思わないほうがぁいいぞ。いくら高ランクのやつだろうが、人質がいる限りはただの人間だからな」
どうやら、オレの両親が高ランクの冒険者だと知ってのことらしい。多分、街に入って宿屋へ向かったときに一緒にいたのを見られて、こんなことをしたんだろうなぁ。
はぁ、馬鹿だな。まったくもって、哀れみしか感じないよ。
オレは確かに手足も封じられてるし、口も封じられてる。いくら神様からいろんなものをもらってもこの状況じゃあなにもできないと思う。というより、オレはまだ習っただけで、何もできないんだけど。
でも、ねぇ〜。
オレの両親は伝説のＳＳランクだぞ？しかも、オレはその両親の一人息子だぞ？
ああ、可哀想に……。多分死んだほうがマシなことが起きるんだろうなぁ。と、いうより以前似たようなことがあって、地獄を見た。だから俺は忠告してやった。
「ウバブヴ（今すぐ）、ボエゴババジダボブバビビボ（オレを離したほうがいいぞ）」
しまった！猿轡されてるんだった！
「おい、何か言ってるぞ。黙らせるか」
そう言ってオレを真正面から殴る可哀想な人たち。まだ体が弱いオレはそれで気を失った。
あーあ。オレに傷を付けちゃって。本当にどうなるんだろうな。

気づいたら母さんの顔があった。
「ああ、ルシア！！やっと気づいたのね！！ほんと～うに心配したんだから！！」
そう言って俺を抱きしめ……い……き……が……
そして、オレは気を　失わなかった。
危ない母さんがあと０．１秒抱きついていたら死ぬところだった……。
転生したあと母親によって殺されるってどんな存在だよ！
あ、遅くなったけどルシアってオレのことね。コルクルシア・ニーダルで、ルシア。
「ああ、ごめんね苦しかった？でもね、でもね。ルシアが無事だって分かって居ても経ってもいられなかったの」
ははは、母さんよ。だからって、持つの息子を殺しそうになるのはいかがなものか。
しっかし、今オレがいるのはまだ下衆に連れてこられた場所のようだ。どうしてわかるかというと、下に下衆１号の頭が見えるからだ。後ろからだから、顔に何かされたのどうかがわからない。というか知りたくない。こ、怖すぎる。
「あ、ルシア、こんな汚いものなんか見なくていいからね」
そうして、オレを抱き上げ視線を顔に固定する。
「あれ、疲れちゃったのかな？顔が青いわよ」
そういうわけじゃあないんだけど。
「じゃあ、おやすみ。彼の者を眠りへと誘え≪睡眠術≫」

そうして、オレは強制的に眠らされ、今日に至る。起きると父さんに話しかけられた。
「おはよう、ルシア。昨日は災難だったな。いや、というよりすまんな。いくらお前が他の子と比べしっかりしているとはいえ、まだお前は三才なんだよな。しっかりとすべきだった」
「ううん、僕のせいで余計なことさせちゃったんだから……」
どうやら、今オレは宿屋の部屋にいて、母さんは外に今回のことを報告しに行ったそうだ。
そうだ！この機会に色々と戦闘技術を教えてもらうか。
「おとうさん！僕わかっているんだよ！だって、もし僕が捕まらなかったら何も起きなかったんだよね！？」
「いや、そういうわけじゃあないんだが……」
「でも、でも、お父さんたちに迷惑をかけなかったんだよね？」
「迷惑だなんて「だから、教えて！また、あんなことが無いように僕、頑張るから！」
ふふふふふ、必殺幼児の可愛い泣き頼み！これに、断れる奴はいまい。
「仕方ない、お前がそこまで言うのならば母さんと相談して、剣の使い方とか魔法の使い方とか教えるかどうか決めるからな。今までいろいろと教えていたが、もしやることになったらただ覚えるだけ

じゃあないから難しいぞ！それでも、いいんだな？」
「うん！」
「わかった。言っとくが、俺の訓練は厳しいからな。とりあえず、母さんに会いに行くからここで待ってろよ」
「うん、わかった」
こうしてオレは、親からさらに色々なことを学ぶこととなった。

だから、その礎になった下衆共には感謝している。
そして、改めて思った。

両親が強すぎて怖い。

二話：いやはや、こわっ（後書き）

≪　≫の中が魔法名です。
アドバイス、感想をくださるとありがたいです。
誤字脱字があれば報告してください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3092z/

神になった転生者

2011年12月15日00時54分発行